

令和 4 年 5 月 24 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00659

研究課題名(和文) 英語比較級構文の分析化に関する認知社会言語学的研究

研究課題名(英文) A Cognitive Sociolinguistic Study on the English Comparative Constructions

研究代表者

渋谷 良方 (Shibuya, Yoshikata)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：70450690

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：世界の言語は、分析的言語や総合的言語などのタイプに類型化されることがある。言語類型論や歴史言語学では、英語は総合的言語から分析的言語へと変化(分析化)していると長い間考えられてきた。本研究では、分析化を見せる構文の1つと称される英語比較級構文を取り上げ、レジスターや方言などの変数に加え、構文(の機能)や共時性・通時性などの変数を加えた調査を、コーパスを用いて行った。研究の結果、英語比較級構文の分析化には、レジスター、構文のプロパティ、変種(方言)などの複数の要因が関わっていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、分析化現象がレジスターや方言などに深く根ざした現象であることが実証的に明らかになった。このことは、分析化現象だけでなく、言語変化自体にとっても重要な意味を持つ。本研究の成果により、自然言語の使用のなされ方や言語変化のメカニズムについて深い理解が得られたが、これは人と言語の関係を理解する上で重要だと思われる。

研究成果の概要(英文)：World languages are sometimes classified into analytic and synthetic languages. In linguistic typology and historical linguistics, English has long been considered to be changing from a synthetic to an analytic language (i.e., 'analyticization'). In this study, I examined English comparative constructions, which are known to exhibit analyticization. More specifically, variables such as register and dialect, in addition to constructional properties and synchronicity/diachronicity, were investigated using corpora. The study revealed that several factors, such as register, constructional properties, and dialects, are involved in the analyticization of English comparative constructions.

研究分野：英語学、認知言語学、コーパス言語学

キーワード：英語比較級構文 分析化 言語変化 レジスター コーパス 構文

1. 研究開始当初の背景

世界の言語は、形態的特徴に基づき、分析的 (analytic) 言語や総合的 (synthetic) 言語として分類されることがある (cf. Schlegel 1818; Sapir 1921; Greenberg 1960)。分析的言語とは1語が1形態素から成る言語を指し、総合的言語とは1語が複数の形態素から成る言語を指す。分析的 vs. 総合的という区別は、言語の形態的傾向を一般化するために用いる概念にすぎず、それが特定言語の明確な分類とはなりえないことはよく知られている (e.g. Sapir 1921)。しかし、ここで興味深いのは、世界の言語では一般的に分析的言語への変化 (分析化) が見られると報告されていることである (e.g. Haspelmath and Michaelis 2015)。例えば、英語では、補文標識、等位接続詞、限定詞、不定詞マーカ、否定辞などの分析的トークン (analytic token) (Szmrecsanyi 2012) の存在・出現に基づき、総合的言語から分析的言語への変化が生じていることが述べられている (e.g. McArthur 1992)。分析化の現象が、英語を含む世界の様々な言語で進行する一般的な言語変化のパターンであることを考えると、この現象に関わる諸問題の解明は言語学の発展にとって必要だと考えられる。

本研究では、分析化を見せる構文の1つである英語比較級構文を研究する。同構文については、例えば形容詞 *likely* で起きたような、*-er* 比較級から *more* 比較級への変化が他の多くの形容詞にも広がっていること、すなわち同構文では分析化が広く拡散 (進行) していることが、これまで多く主張されてきた (e.g. Kytö and Romaine 1997)。しかし、近年、変異理論に基づく (variationist) 社会言語学的研究では、例えば、Szmrecsanyi (2009) において、英語の様々な分析化構文に関するコーパス研究が行われ、最近のイギリス英語とアメリカ英語の書き言葉では、より総合的な言語への変化が見られることが論じられている。また、Szmrecsanyi and Kortmann (2009) では、世界の英語の変種間では分析化の進行程度に関して非常に豊かな多様性が見られることが示されている。このことは、類型論や歴史言語学などの研究に代表される従来のマクロな視点からの研究では発見不可能であった事実が、変異理論に基づく微視 (ミクロ) 的視点を持つことによって明らかになることを示唆している。

ミクロ的観点から分析化現象を考察する必要性は、申請者が英語比較級構文について行った予備的調査でも確認された。当該調査では、共時的・通時的コーパスに基づく研究を行い、同構文には一方的な分析化の進行は確認されず、むしろレジスターや変種 (方言) 間に非常に豊かな多様性が存在することが示された。なお、同調査では、分析化の説明には、構文文法 (Croft 2001) (および認知言語学) の理論的前提や分析方法 (e.g. Stefanowitsch and Gries 2003) が有効であり、これによって記述力と説明力が向上することも確認された。

そこで本研究では、申請者の予備的調査結果を学術的背景とし、レジスターや方言という変異理論の変数に加え、構文 (の機能) や共時性・通時性といった新たな変数を加えた調査を行い、英語比較級構文の分析化に見られる豊かな多様性や変化のメカニズムを、コーパスを用いて体系的かつ包括的に研究する。なお、本研究の対象言語は英語だが、その理由としては、英語が申請者の専門領域であることに加え、本研究で求められる水準のデータ量や体系性を備えたコーパスを有する言語は英語以外に存在しないことが挙げられる。

理論的には、本研究のアプローチは、変異理論的社会言語学 (e.g. Tagliamonte *et al.* 1997; Cheshire and Fox 2009) と、用法基盤の構文文法 (および認知言語学) (e.g. Langacker 1987, 1999; Croft 2000, 2001; Croft and Cruse 2004; Bybee 2010) の視点を併せ持つ、認知社会言語学 (Cognitive Sociolinguistics) (cf. Hollmann and Siewierska 2007; Kristiansen and Dirven 2008; Hollmann 2013) と呼ばれる言語学の新しいパラダイムに依拠している。

本研究では、研究課題の核心をなす学術的「問い」として、「世界の言語で拡散 (進行) が報告される分析化現象は、認知社会言語学的視点から見ると、どのように規定できるのか」を設定し、それを解決するための研究目的として、英語比較級構文における分析化の進行を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究は上述の学術的「問い」に答えるため、英語比較級構文における分析化の進行を明らかにすることを目的とする。具体的には、同構文に関して、レジスター、変種 (方言)、構文 (の機能)、共時性・通時性、などの変数と分析化との関係性の解明を目指す。

本研究の独自性は、Szmrecsanyi らが着目したレジスターや方言といった社会言語学的変数に着目しつつも、構文文法 (および認知言語学) の用法基盤モデル (e.g. Croft 2000, 2001; Bybee 2010) に依拠して、英語比較級構文の分析化を、共時的観点と通時的観点の両方から分析する点にある。本研究が進める包括的アプローチは、これまでの研究では見られなかった。

申請者の予備的調査において既に示されているように、本研究によって分析化に関する数多くの新事実が発見されることは明白であり、創造性は非常に高いと言える。さらに本研究は、社会言語学と認知言語学の融合を目指す認知社会言語学の流れを汲む研究であることも特筆に値する。Hollmann (2013) で述べられているように、認知社会言語学は、音声・音韻、語彙、文法などの狭義の言語構造に関するアプローチとしてだけでなく、言語政策などの言語使用に関係

する政治問題 (Berthele 2008; Janicki 2008) や、言語学習や言語教育に関する諸問題 (Holme 2009; Littlemore 2009) などの応用的分野にとっても有効なアプローチとして注目されている。このように認知社会言語学は、今後の言語学の発展、広義には人間、言語、社会の関係性に関わる研究全般の発展にとって、大変重要な意味を持つアプローチであり、その意味で、本研究の知見は、類型論、歴史言語学、社会言語学、認知言語学などの近接領域のみならず、他の周辺領域への影響力までも秘めた創造的研究だと考えられる。

3. 研究の方法

(1) 用いた主なコーパス

- Corpus of Historical American English (COHA) : 1810~2009 年のアメリカ英語 4 億語以上を収めたコーパス
- Corpus of Global Web-Based English (GloWbE) : 2012~2013 年の間、20 カ国の英語圏で使用された英語の変種を収集した約 19 億語から構成される巨大コーパス (国名: the United States, Canada, Great Britain, Ireland, Australia, New Zealand, India, Sri Lanka, Pakistan, Bangladesh, Singapore, Malaysia, Philippines, Hong Kong, South Africa, Nigeria, Ghana, Kenya, Tanzania, Jamaica)

(2) 分析に用いた主な手法

- ケンドールのタウ係数 (Kendall's *tau*) に基づく検定
データセット中で観察された通時的変化のパターンが、統計的に有意な形で時間的変化と相関しているのかを調べるのに用いた。
- ロジスティック回帰分析
英語比較級交替に関与すると思われる複数の要因の関係性を調べるのに用いた。
- ランダムフォレスト
ロジスティック回帰分析と同様、英語比較級交替に関与すると思われる複数の要因の関係性を調べるのに用いた。また、ランダムフォレストは、分類の目的でも用いた。

4. 研究成果

- COHA では、分析型が統計的に有意な増加傾向を示すのは、ノンフィクションの書籍においてのみであった。一方、フィクションや雑誌では、分析型が増加するという予想に反し、総合型が増加していた。このことは、分析化にはレジスター要因が深く関与しており、レジスター毎に分析化の進行の仕方が様々に異なることを示している (図1参照)。この結果は、言語変化研究自体にも重要な含意を持つ。すなわち、言語変化を考察する際には、レジスター基盤の構文研究を行うことが重要であることを示唆している。
- GLOWBE データを、ロジスティック回帰分析を用いて分析した結果、カナダ英語、イギリス英語、アイルランド英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語などにおいて類似性が確認された。このことは、英語変種間の比較を行うことの重要性を示唆しており、英語話者の文法知識は変種間で豊かに異なりうる事が明確に示されている。

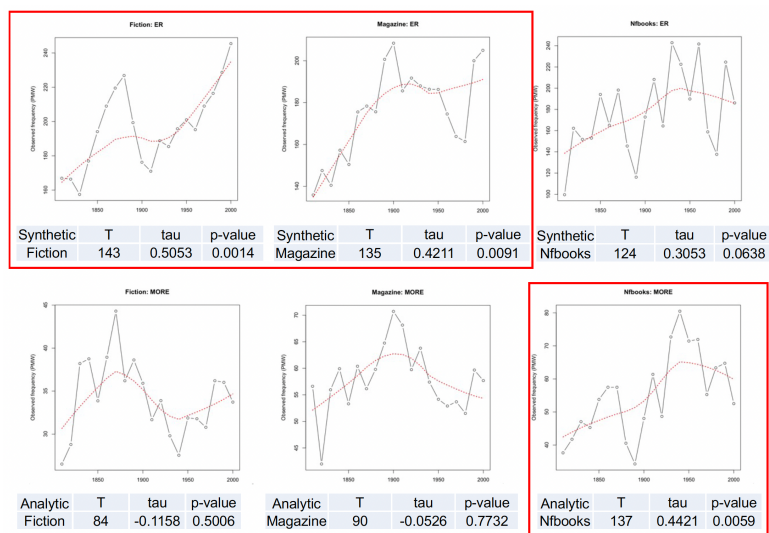


図 1. COHA の各レジスターにおける英語比較級構文の通時的分布と各指標

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Yoshikata Shibuya	4. 巻 5
2. 論文標題 Examining the analytic shift hypothesis in the English comparative constructions : A corpus-based diachronic study of register variation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Cognitive Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yoshikata Shibuya
2. 発表標題 A corpus-based diachronic analysis of register variation in English comparatives
3. 学会等名 The 15th International Cognitive Linguistics Conference（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関